

# 2章 健康寿命への寄与

## ～歯科医師の大きな役割～

### 1. 超高齢社会と歯科医療

日本歯科医師会 常務理事

佐藤 保

本章の主著者である大島氏は、常々「当たり前のことを当たり前のこととして話している」と言う。しかし、当たり前のことを当たり前として話すには、見識のみならず熱意、情熱が必要であろう。また話し続けるためには信念と忍耐、意志の力を必要とする。

大島氏は、本章を構成するキーワードとして、超高齢社会、専門職の責任、パラダイム転換の3つを掲げている。その趣旨を「時代によって求められる医療は変わるが、なかでも人口構造の変化は医療需要を大きく変化させる。今我が国は超高齢社会を迎えて大きな転換期を迎えているが、このような転換期での歯科医療はどのような方向に向かうのか、専門職団体の役割や使命は何かについて述べる」として、各項で記述している。

高齢者の医療について著者は、「完成された個体に対する医療と高齢者の医療では、高齢者にとって、正常な、あるいは至適な状態とは個人によって多様であり特異的であるため、臓器の機能と全身機能の至適な平衡、調和状態を知って、その人にとってもっともよい状態への回復を目指すような医療が適しているのである。(中略)今までも高齢者はいたのに、何故このような医療が行われてこなかったのかである。この疑問に対する答えは実は明らかである。実際の診療の場では、10年も20年も真剣に患者に接してきた臨床医であれば、論理的に説明することはできなくても、高齢の患者としばらく接していれば、主診断が、例えば

癌の場合には、その治療について、癌を摘出して化学療法も行う徹底的な治療が適切か、むしろ何もしない方がよいかなど、ほとんど瞬時に直感で判断して大きな誤りはなかったのだと思う。それが何故、今、大きな問題となり始めたのか。長生きの実現により高齢化した大集団が発生し、高齢者にまつわる様々な問題が顕在化してきたという社会背景のもとで、これまでの徹底的に病院で治すという医療だけでは、老化や死に無力であるだけでなく、時に非常に不幸な結果をも生むということを、社会も国民も気が付き始めたからである」と述べている。

さらに「広辞苑をみると、医療：『医術で病を治すこと』と記されている。これ以外の記述はない。医療が『治す』だけのものなら、緩和医療や終末期医療は医療ではないのか、とか、本当に病気は医術だけあれば、それで治るのかとか、治らない病気には医療はないのかとか、ちょっと考えれば当たり前湧いてくる疑問をぶつけてみたくなるが、そんな議論をすることに意味を感じさせないほど、断固として明快である。私はこれを見た時に、驚くよりもむしろよくまあ、一言で20世紀の医療を見事に言い表したものだと思嘆した」と述べている。

本章は、高齢者医療において日本のみならず、世界のトップランナー、国立長寿医療研究センター総長大島伸一氏と、大久保満男日本歯科医師会会長が執筆された珠玉の章であり、歯科医師必見の章でもある。